



東京・春・音楽祭 2026 SPRING FESTIVAL IN TOKYO

J.S.バッハ（山下愛陽編）：

リュート組曲 第3番

バッハのリュート組曲は全部で4曲あるが、そのうち2曲は自作の無伴奏作品をバッハ自身が編曲したもの。「第3番」は「無伴奏チェロ組曲 第5番」を原曲としており、編曲された時期は1730年前後とされる。フランス風序曲のプレリュードに始まり、全体的に典雅な響きを基調としているが、どこか内省的でほの暗い情熱を秘めている。最後は印象的な付点リズムのジグで締めくくる。

前奏曲 ハ短調

本作は1720年頃に作曲された単一楽章の小品。分散和音のみで構成され、絶え間なく流れるような哀愁漂う響きが特徴。ハ短調から始まり、緊張感のある不協和音を交えながら、最終的にト長調（属和音）で半終止して曲を閉じる。

リュート組曲 第2番

「第2番」は編曲されたものではなく、リュートのために書かれた作品で、おそらく1740年頃、バッハのライプツィヒ時代の作とされる。変わった構成を採っており、前半にはバロック時代のソナタのようにプレリュード、フーガが置かれ、後半には組曲（パルティータ）のように舞曲が並ぶ。全体に哀愁を帯びており、落ち着いた美感を醸し出している。

A.タンスマン：インヴェンション《バッハを讃えて》より パスピエ、2声のトッカータ

《バッハを讃えて》は、アレクサンデル・タンスマンが1967年に作曲したギター独奏用インヴェンション（タンスマンには同じタイトルのピアノ曲集もあるが、内容は異なる）。「パスピエ *Allegro con moto*」「サラバンド *Lento cantabile*」「シシリエンヌ *Allegretto*」「2声のトッカータ *Moderato*」

「アリア *Lento cantabile*」の全5曲から構成され、バロック音楽の形式を借りつつ、タンスマン特有の近代的な和声感を織り交ぜている。タンスマンは伝説的なギタリスト、アンドレス・セゴビアと親交が深く、多くのギター作品を彼のために書いたが、本作もその流れを汲み、洗練されたギターの書法を備えている。

A.バリオス：大聖堂

アグスティン・バリオスの「大聖堂」は、1921年に作曲されたクラシック・ギター作品の最高峰の一つ。創作の契機は、ウルグアイのモンテビデオ大聖堂で聴いたバッハのオルガン曲と、聖堂外の喧騒の対比にインスパイアされたことによる。第1楽章「前奏曲（悲しみ）」は、1938年に追加された楽章で、静謐で叙情的なメロディが深い喪失感と祈りを表現している。第2楽章「宗教的アンダンテ」は、重厚な和音によるバッハ風の構成で、大聖堂内部に響くパイプオルガンの響きと宗教的静寂を描写している。第3楽章「荘厳なアレグロ」は、16分音符のアルペジオが持続するなか、聖堂の外に出た時の街の喧騒や人々の活気ある様子を表現している。

J.S.バッハ（山下愛陽編）：

前奏曲、フーガとアレグロ

1740～45年頃の作で、当代随一のリュート奏者であったシルヴィウス・レオポルト・ヴァイスとの親交から生まれた。プレリュード（前奏曲）、フーガ、アレグロの3楽章からなり、簡素化されたソナタのような構成となっている。リュートまたはチェンバロのための曲で、低弦の動きに撥弦楽器の妙を生かした響きが聴取される。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番 より シャコンヌ

シャコンヌは「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番」の終楽章（第5楽章）に置かれている。シャコンヌは、3拍子系の古い舞曲を出自とし、バッハの無伴奏作品のなかでも屈指の名品であり、単独で取り上げられる機会も多い。冒頭で提示される8小節の主題が、4小節ずつ前半・後半に分かれて同じ和声進行を繰り返し、さらにその8小節の主題が30回にわたって変奏される。舞曲という枠組みをはるかに超えた「音楽による建築物」ともいえる世界が、一挺のヴァイオリンによって形づくられていく。